

農空間

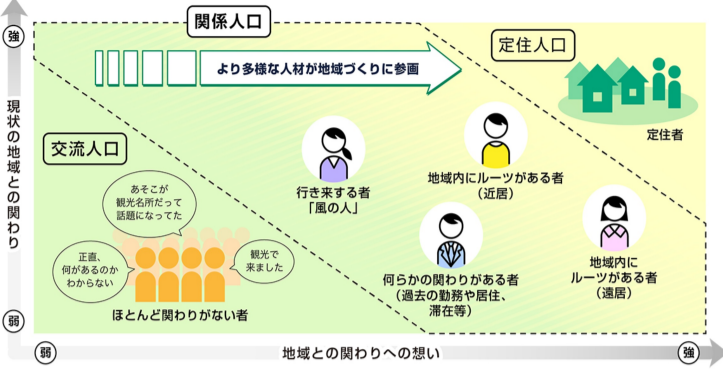
第84号

発行所
福島県農林水産部
農村計画課

【特集】関係人口の受け入れによる農村地域の活性化

皆さんは、「関係人口」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。

同じような言葉で、主に観光目的で地域を訪れる人たちのことを指す「交流人口」という概念もありますが、「関係人口」は、気軽な「交流人口」とハードルの高い「移住・定住人口」の間にある様々な段階の人たちの総称とされています。



関係人口概念図 (出典：総務省HP)

このような人たちに、地域のファンになっていただき、農作物や特産物の購入だけに止まらず、田畑や水路、道路の維持管理や地域の祭りの運営などに参加してもらいながら、地域の方々の関係を深める活動が全国各地で取り組まれています。本県においても、関係人口を拡大し、農村地域の維持や活性化に役立てていただくことは非常に重要なことと捉え、農村の方々の関係を深めて地域の維持・発展に貢献する「農村関係人口」の拡大に取り組んでおりますが、それぞれの地域の

状況を踏まえると、いくつかのステップがあると考えています。

まずはじめに、農村関係人口の拡大に向けては、地域外の方が地域の魅力に共感し、「ファン」になってもらうことが重要ですが、地域の魅力を住民自らが認識し、地域に誇りを持つようになる必要があります。農村地域の人は、「こんな田舎には何もない。」などと言いがちで、よく言えば謙虚ですが、外部に魅力を伝えようとしたときにはマイナスになりかねません。地域の中にいると「当たり前」の物事であっても、外から見れば素晴らしい価値があり、地域の自慢になることも多いのが重要です。

次に、自慢できることがあれば、地域への愛着も湧き、自分たちの地域をどうしていくかを真剣に考えたいと思えますので、地域の課題を明確にし、地域の将来像を話し合ってもらい、地域一丸となってその実現に必要なことを考えます。

続いて、「ファン」候補へのPRです。コロナ禍でテレワークが普及し、必ずしも「都会に暮らさなければ仕事にならないわけではない」ということが一般的な認識になりつつあり、農村地域への関心が高まっているとも言われる昨今、そういった方々に響くようなPRが重要です。PRが成功し、ファンになって貰えば、継続的な体験交流などを通じて農村地域と関わりを続け、将来的な活性化につなげていけるものと思います。

最後に、関係を維持するためには農村地域と外部の人たちを繋ぐ仕組みを継続していくことも重要です。実際には地域の状況は様々で、必ずしも段階的に発展していくとは限りませんが、県では農村関係人口の拡大に向けて取り組む地域に対して、関係部署と連携し、効果的な支援策を展開していきます。

【農村振興課】

地域に根ざした水土里ネット

千軒平溜池土地改良区

千軒平溜池の完成と改良区の誕生

二級河川仁井田川に水源を求める当地域(旧大野村・旧大浦村・旧四倉村の一部)の耕地五七〇余haは、用水の不足を訴え、田植えの適期になっても植付け不能となる事があり、水騒動も各所で起こるほど、常習的な干ばつに悩まされてきました。この憂いを解消するため、昭和十二年頃から千軒平に目を付け、昭和十五年九月に最適地と認定されました。

この実現を期して、昭和二十二年十二月に期成同盟会を結成し、同二十三年八月、遂に県営大規模かんがい排水事業の指定を受け、本事業を推進することになりました。その後、法の改正により、昭和二十六年八月に今の『千軒平溜池土地改良区』が誕生しました。

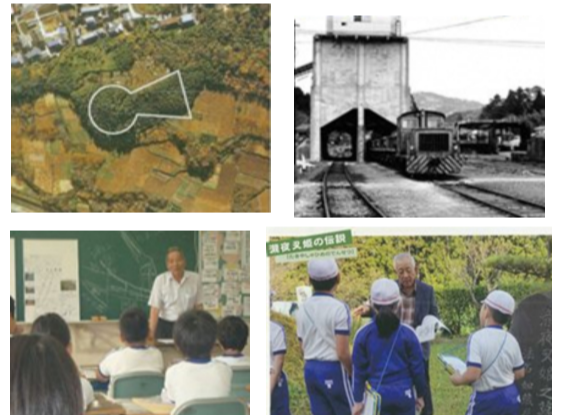
千軒平溜池築堤事業は、昭和二十三年十月に起工式を挙行。堀江工業株式会社と施工契約を締結し、翌年一月着工、約二億円の工費と、十年余の歳月を待つ、昭和三十四年十月に千軒平溜池が完成しました。



水面に映し出される美しい光景 (満水の千軒平溜池)

玉造学舎歴史の伝承

この玉山地区には、数々の由緒ある歴史が残っています。地元の小中学校では、玉造学舎として大野の歴史を知り、大野の未来をつくる旅が行われていました。明治三十九年四倉市街から北西へ約十二kmの近代採掘法による八茎鉱山開発。採掘されていた銅鉱床の上部に豊富に賦存していた石灰石に着目し、これを原料とするセメント工場を四倉に設立、更に、製品輸送に便利な日本鉄道磐城線を起業。その後、玉山専用鉄道と名付けられ、今でもその一部が残っている場所もあります。



大野の歴史を学ぶ小学生と玉山鉄道

昭和六十三年から継続している基盤整備事業

改良区では、昭和六十三年に県営戸田南地区ほ場整備事業の採択を受け、その後、小久地区、長友地区、白岩地区、大野第一地区、大久地区、大野第二地区、そして今年の三月に事業が完了した下仁井田地区と、約三十年以上に渡り整備事業を継続しており、当改良区の受益地は、現在進めている大野第三地区でほぼ完了となります。しかしながら、時代の流れには逆らえず、この地区も高齢化並びに、担い手不足に悩まされており、この先、十年後、二十年後と今の田園風景を守るための課題は山積みですが、住民の方へ協力を頂きながら、この素晴らしい環境を守って行きたいと思えます。



久之浜大久地区の整備されたほ場

水路橋の長寿命化対策

県内からの便り
南会津農林事務所



水無水路橋 (施工前の現況写真)



水無水路橋 (下塗り3回目作業状況)

和歌山県で発生した水管橋の崩落を受け、全国的に農業用水管橋及び水路橋の点検が実施され、今後も多くの施設で長寿命化対策を求められることが想定されるため、管内において現在実施している2箇所の水路橋補修工事について紹介いたします。

1 水無水路橋の補修工法

旧田島町内の水路橋上部工の再塗装及び余水吐の更新工事です。上部工(鋼製)の塗膜が剥がれ、一部に錆は発生しているが、ケレン(旧塗膜を落とす作業)後の確認で鋼材は健全であることから、塗装の塗替えのみで長寿命化が図られると判断し、塗装工を実施中です。また、余水吐は破損により橋台側面を浸食していたため、布製型枠による排水溝を整備する予定です。

2 大桃水路橋の補修工法

旧伊南村内の水路橋上部工の補強、塗装及び橋台のコンクリート補修工事です。上部工全体が錆による腐食が進み、橋台との接続部付近で漏水が発生していた影響で橋台表面が洗掘されていました。設計段階の補修工法は、上部工の錆除去と側面及び底面への補強鋼材溶接・再塗装、橋台のコンクリート表面破損箇所はつりとポリマーセメント系断面補修材による表面補修を予定していましたが、

しかし、上部工底面は想定以上に腐食が激しく、鋼材としての強度が全く確保されていないことから、底板を全て撤去後に鋼板を溶接することとしました。

なお、主桁(H鋼)は、錆による腐食は進んでいるものの鋼材の厚みが確保されていることから、ケレンによる錆除去後、弱溶剤形さび面素地調整補助剤により、さび面の遮断と新たなさび抑制を図り、補強として水路橋内部に鋼板を溶接することとしました。

3 今後の課題

今回補修した水路橋は、設置年度や事業名が不明なため、橋梁構造や塗装方法を現場状況から推察するなど、委託費等も高額になりました。もし、橋歴板の設置や設計図書等の保管が行われていれば、安価に施工できたと思われれます。今後、施設の更新が更に増えることが予想されるため、建設時や補修時の資料保管や歴板等の現場設置が重要となります。

福耕支援隊情報

相双農林事務所農村整備部では、今年度は7県から11名の福耕支援隊の応援をいただき、被災地の復旧・復興に向けて日々の業務に励んでいます。今回は3名の方のメッセージをご紹介します。

【氏名】阿部靖広 技師(埼玉県)

【所属】農村整備第一課

【担当】ほ場整備原町南部地区

(南相馬市原町区)

『どーもどーも！福耕支援隊2年目となりました！浜通りは県内でも比較的暖かく、持ち前のアフロもワサワサと育っており。一歩ずつ復興が進んでいる原町南部地区では、震災後初の水稲作付けを再開したほ場が黄金色に輝き、今年度も無事に収穫を迎えることができました。現場からは以上です！』



中央が阿部技師(埼玉県)

【氏名】林佑祐 技師(青森県)

【所属】農村整備第二課

【担当】ほ場整備原町東地区

(南相馬市原町区)

青森県から着任して2年半が経ちました。地区の完了が近づき、ますます力を入れていく段階です。まだ学ぶこともあり、自分のことで精一杯ですが、これからも福島の魅力を感じ伝えながら、復興の一助となるよう励みます。



林技師(青森県)

【氏名】花城副主査(沖縄県)

【所属】農村整備第三課

【担当】ほ場整備岡田地区

(南相馬市小高区)

ほ場に残る瓦礫の多さ等、津波被害からの復旧の難しさに苦戦していますが、職員に支えていただき業務を行っています。

こちらに来ることで知ることができた復興状況や福島県の魅力を沖縄へ発信しながら、微力ではありますが、復興の一助となるよう頑張ります。



花城副主査(沖縄県)

「農空間」とは、農業の営み、それを支える農地や水、人々の生活、そして、美しい自然に囲まれ長い間に培われた伝統・文化などが溶けあつた空間の事です。

新規採用職員の紹介

- ①氏名・所属
- ②出身地
- ③学生時代の専攻
- ④自己紹介

① 緑川 美智子

会津農林事務所農村整備部

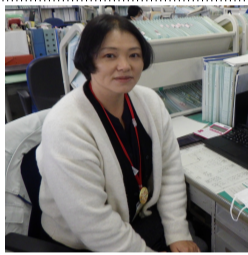
② 福島県南会津町

③ 前職は、建設業の現場代理人に従事していました。20年仕事を

してきた中で、度重なる自然災害を経験し、災害復旧工事を行う中で、治山・治水の重要性を学んだと思っています。

また、前職で農業施設工事に携わり、大規模農業化・農業用設備のICT化の技術に触れ福島県において、農業土木を志望しました。現在は農地計画課において、新規事業の採択・計画に係わる業務を担当しています。

まだ、わからない事も多く先輩職員に教わりながら業務に取り組んでいます。これから、いろいろな事を経験し、また前職の経験を生かせるよう努力していきたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願いいたします。



① 松岡 絢

会津農林事務所農村整備部

② 福島県福島市

③ 農学部総合科学研究所

④ 学生時代に農業用水路の生態系保全に関して学んだことで、環境に配慮した水路の設計などに興味を持ち始めました。福島育ちで幼い頃から福島の農作物に親しんできたことから、東日本大震災で大きな被害を受けた福島の農業の復興に携わりたいという思いもあり、福島県の農業土木を志望しました。



① 秋林 日奈

南会津農林事務所農村整備部

② 福島県福島市

③ 食料生産環境学科農村地域デザイン学コース

④ 大学進学を機に福島を離れたことで、地域ごとに様々な特色を見せる福島県の農業に改めて魅力を感じ、大学で専攻した農業土木の知識を生かしながら農業に関わる仕事がしたいと思い、本職を志望しました。

現在は、中山間地域総合整備事業南会津西部地区と農村環境整備事業実施計画鶴巣地区を担当しています。初めてのことに戸惑うことも多々ありますが、周りの先輩方や上司に助けられながら、設計書の作成や監督員業務に日々励んでいます。経験を積んでいく中で様々なことを学び、一人前の県職員になれるよう努めます。これからよろしくお祈りします。



トピックス

第70回 農業農村工学会 全国大会の開催

令和3年8月31日(火)から令和3年9月2日(木)にかけて、第70回農業農村工学会全国大会が福島大学で開催されました。本県は今年度大会の運営事務局として、開催に向けて学会及び開催会場である福島大学と開催方式など各種調整を行い、精力的に準備を進めました。本大会は、会員相互における農業農村工学に関する最新の専門知識・情報の交流を促進するため、毎年開催されているものです。

当初の予定では、東日本大震災(以下「大震災」という。)から10年が経過し、全国から技術的・人的支援を頂きながら着実に復興を進めることができた現場を、全国の皆様に現場研修として発信する機会が設けられていました。しかし、新型コロナウイルスの収束が見通せないことから、安心して安全な大会講演会とするため、昨年に引き続きWeb会議ツール(Zoom)を使用したオンライン開催となりました。各セッションにおいて、各大学・研究機関、行政、企業等の総勢1,302名の参加者とともに、熱い議論が展開されました。

大会3日間を通して7会場で9つのセッションが設けられ、各セッションでは水理、土質力学、農村計画など13部門の発表があり、口頭発表301件(一般210、スチューデント16、企画75)、ポスター発表60件(一般56、スチューデント4)、要旨のみ発表40件(一般36、企画4)の研究発表が行われ、聴講者は各々興味のある発表を選択し、Zoomのチャット機能を用いて、質疑応答を行いました。

開会式では、運営委員長・樽屋啓之北里大学獣医学部教授、農業農村公学会・平松和昭会長の挨拶に続き、来賓として農林水産省農村振興局・安部伸治次長の挨拶を頂き、DX時代を見通した技術開発と交流に期待が寄せられました。

企画セッション「東北地方太平洋沖地震で被災した藤沼池改修における設計・施工上の技術課題に関する検討と安全性評価について」では、本県からも「藤沼ダムの再建と安全性の確保」と題して発表があり、藤沼ダムの被災状況から復旧・復興への取組を全国に向けて発信することができました。

また、特別講演では、福島大学食農学類長・生源寺眞一氏より「近未来の農業・農村像と農学の人材育成」、ラジオ福島元アナウンサーの大和田新氏より「伝えることの大切さ、伝わることの素晴らしさ」東日本津波原発事故大震災から10年を講演頂きました。特別講演は、富岡第2中学校体育館の避難直後の写真、南三陸町の津波による被害写真、飯館村に大量に仮置きされている放射性物質汚染土の写真により震災当時を振り返り、改めて大震災の被害の甚大さ、その影響力の大きさを改めて実感するものでした。

大震災より10年が経過し、復旧工事が着実に進んでいる一方、早くも大震災の記憶は風化が始まっているのが現実であり、福島県の現状と課題を発信することの重大さを認識する良い機会を特別講演では与えていただきました。

大会が開催された3日間は大きなトラブルもなく無事に終了することができ、各会員間にあつては知識・情報の交流促進に寄与できたと思っております。

次年度、開催予定である石川県大会においては、一刻も早い新型コロナウイルスの収束と、収束に伴って現場研修を含め、令和元年度と同様の対面による活発的な研究発表が行われることを期待したい。

大和田 新氏による特別講演の様子



大和田 新氏による特別講演の様子